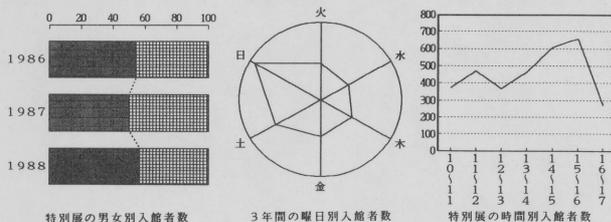


西宮市立郷土資料館ニュース



第4号 1989年1月1日発行

資料館ノート

郷土資料館入館者数の動態

西宮市立郷土資料館は昭和60年7月に開館し、開館以来3年が経過した。この間、開館記念事業をかわきりに多くの事業を実施し当初予定していた以上の多数の利用者を得た。これは、郷土資料館自身の努力もさることながら、市民ギャラリーや中央図書館とともに西宮市教育文化センターのなかで併設館として機能していることによるところが大きい。郷土資料館ではこの利用状況について逐次年報などにより報告してきたところであるが、開館3年を経過した現在、併設館としての資料館の利用状況を入館者数についてまとめ、既設の類似館やその他関係機関の参考に供することとした。今回は紙数の都合から本館が実施した特別展および常設展の入館者数の分析に限定した。本館では、常設展示室の入館者数の計測は自動計測装置、特別展は人的計測で行っている。そのため数値に多少質的な差が生じるが、全体の傾向を把握するには充分である。なお、本館では常設展・特別展ともに無料である。

本館では開館以来、毎年約50,000人の入館者数を数える。月毎ではかたよりがあり毎年8月が突出して多い。これは本館特別展に比べ、夏季休暇による中央図書館の利用者増によると思われる。さらに、1月の利用者の

多いことが目を引く。これは市民ギャラリーで「西宮市小中学校合同書写展」が実施される月と一致し、昭和62年1月では入館者が1日1,200人を数え、通常1日約100～130人の平均利用者数が1月には約150人8月には約250人にもなる。これは、本館と併設の中央図書館、市民ギャラリーの集客力の恩恵によくした典型的な例で、利用者数において教育文化センターという併設施設が併設館として有効に機能していることを物語っている。利用者の内訳は、特別展のデータから男性の利用者が若干多いことが伺える。週間では、土・日曜日に週間利用者の45%以上が集中し、水・木曜日がめだって少ない。水・木曜日に休館する施設が多いこともうなずける。1日の利用者数の変化にも特徴がある。特別展のデータでは、11時～12時、15時～16時に利用者が集中する。これら利用者の動態は郷土資料館のみの集客力によるものではないが、併設館である本館の今後の事業展開を考えるうえで、配慮すべき傾向である。

本館では以上のデータが物語る一般入館者のほかに、学校教育との連携という点から学校単位の利用者の獲得に努めている。これも昭和62年度では利用者総数の10%を越え、近隣の類似施設と比較して突出している。

甲子園口遺跡出土の弥生土器

合 田 茂 伸

甲子園口遺跡は1978年4月6日、ビル建設工事に発見され、現地表下約3m（標高約1～2m）に2層よりなる遺物包含層の存在することが判明した。その後の調査から、遺跡は西宮市甲子園口3丁目ほかJR甲子園口駅周辺に広がるものと推定される。

今回、報告する弥生土器は、1978年の調査によって下層の遺物包含層より出土したもののうちの24点である（図1、図2）。それらの器種には、壺形土器・鉢形土器・台付鉢形土器・高杯形土器・甕形土器がある。胎土は褐色を示す少数（12・15・20・21）を除き、灰色～浅黄橙色の淡い色調を呈するものが多いが、器壁断面を観察すると、紅色・橙色を呈するもの（6・7・11・13・18・22・23・24）がある。器表面はいずれも磨滅が少なく、保存は良好である。

壺形土器（1～3） いずれも口縁部の破片である。1は第4様式に属する広口壺形土器のうち頸部に筒状部を有するものである。2・3は第5様式に含まれる広口壺形土器で、腹部の大きく張る型式のものであろう。

鉢形土器（4～7・17） いずれも第5様式に属する。4は外面に広範な指頭圧痕を残すもので、内面調整は粗いくもの巢状刷毛目による。底部や口縁部にはヨコナデがみられない。5の表面は平滑で、外面全体に煤が厚く付着している。6は大形鉢形土器で、表面調整は内外面とも縦方向を基調とする幅広のヘラ磨きである。底部は分厚く大きい。内面には復元円形に磨滅が認められる。7は口縁部が直立するもので屈曲部付近は横方向ヘラ磨き、下半部は縦方向ヘラ磨きである。内面には復元円形に磨滅が認められる。底部のすわりは悪い。17は内外面ともに縦方向ヘラ磨きによって調整を行うものである。

台付鉢形土器（8） 8は短い脚台を有する台付鉢形土器である。外面は6・7のよう

に屈曲部を除いて縦方向を基調とするヘラ磨きである。口縁部は強いヨコナデによって滑らかに整形されている。屈曲部には接合痕があって、その剥離面には刷毛目を観察できる。屈曲部外面の相対する位置に黒斑がある。

高杯形土器（9・10） 9の外面には、4帯にわたって3条単位の櫛描文が施されている。10は杯部内外面、脚部外面をヘラ磨きによって調整している。口縁部内面および屈曲部外面は横方向にヘラ磨きによっていて、その手法は6・7・8に似ている。杯部内面は、6・7同様復元円形に磨滅して、その表面のヘラ磨きは観察できない。

甕形土器（11～16、18～23） 口縁部の知られるものは5点であるが、その形状は互いに異なる。11は受け口状である。12の口縁部のヨコナデは強い。また、胴部内面は、ヘラ削り後の粗い刷毛目とナデによって平滑に仕上げられていて、頸部には明瞭な稜線を形成している。13は「く」の字形に外反する口縁部で、胴部内面を刷毛目によって調整している。14の口縁部はいわゆる「口縁部叩きだし」による。外面には煤が厚く付着している。15は緩やかに外反する口縁部を有する。叩き目が口縁部に及ぶが、口縁端部は強いヨコナデによって凹線文状をなす。16は外面を刷毛目で調整する甕形土器である。底部付近の外面にはやや左上がりの叩き目が残っている。内面には刷毛目とヘラ削り状の強い刷毛目が観察できる。接合できない上半部破片には器壁3mm程度のものがある。18～22は外面に右上がり叩き目が残る甕形土器底部である。ユビオサエによって底部を突出させるもの（18～21）と叩き目が下端に及ぶもの（22）がある。23は外面を縦方向の粗い刷毛目で調整していて、これと形状から推せば、中期に属するかも知れない。24は粗雑な成形による脚台部であるが、内面をヘラ磨きによって調整してい

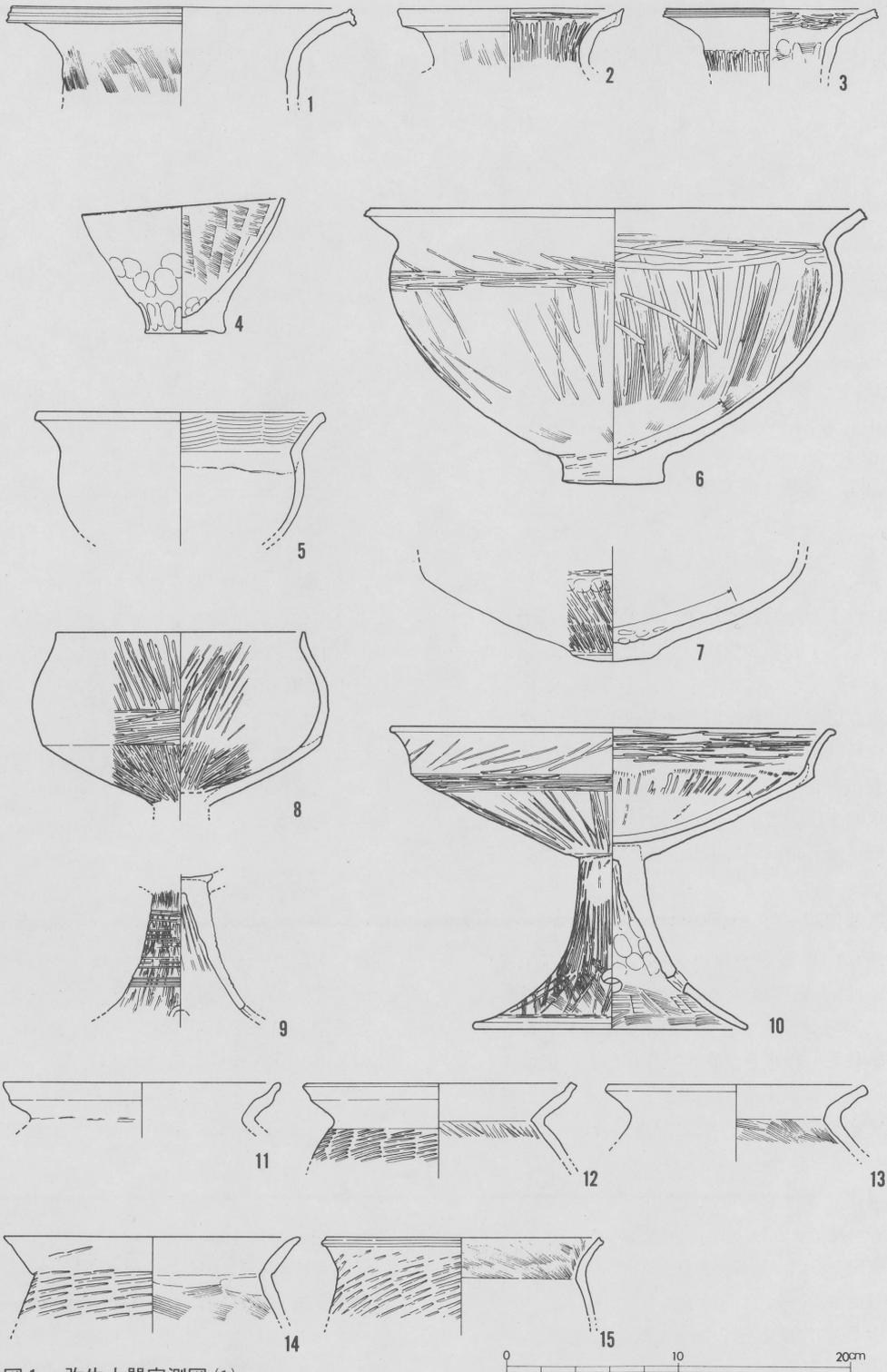


图1 弥生土器实测图(1)

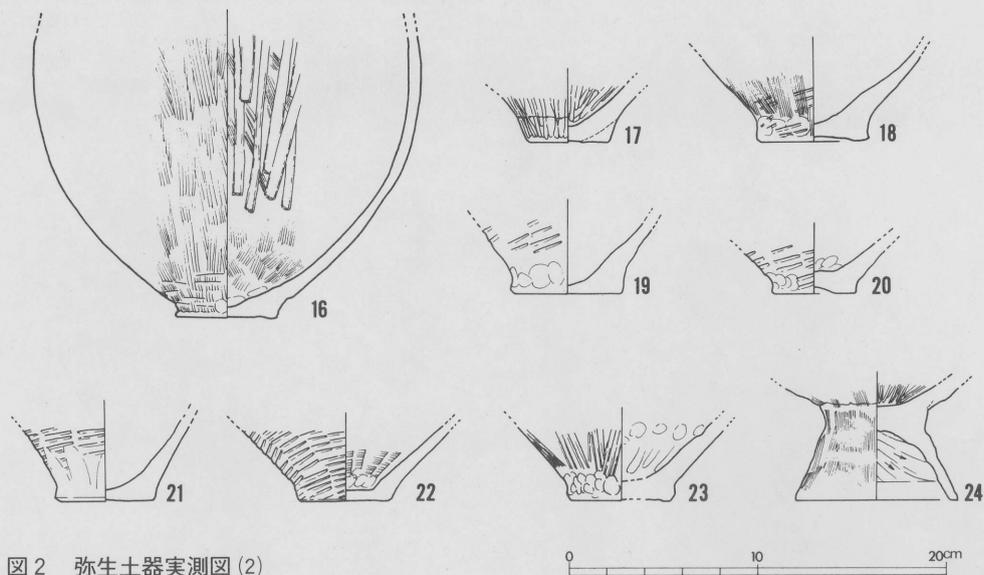


図2 弥生土器実測図(2)

る。

以上が土器観察結果の概要である。土器は1や12・23などを除いて、第5様式に含まれよう。それらに類する様式を近隣に求めるなら、尼崎市田能遺跡第6 Y 調査区第2溝出土資料(尼崎市教育委員会編『田能遺跡発掘調査報告書』1982年)や伊丹市口酒井遺跡第11次調査住居址2炉址上面出土資料(南 博史編『伊丹市口酒井遺跡—第11次発掘調査報告

書』1988年)などがある。ただし、16はそれらよりやや古い型式を示し、また、甕形土器の一部は古式土師器に含まれるかも知れない。甲子園口遺跡ではこのほか6世紀代の須恵器・土師器などが多く出土している。

したがって、当遺跡は、西摂平野において、弥生時代中期から古墳時代にかけて断続する重要な遺跡として認識される必要がある。

寄贈資料一覧

昭和63年：菓子用焼き印など7点(松本英雄)、大東亜戦争美術展集・聖戦美術展集第2集(伊野清一)、学業優等賞与証・初等中学科第七級卒業証書・小学中等科卒業証書・小学第五級後期卒業証書・下等小学第七級卒業証書・学業賞与など28点(吉富マツ)、敲

き板・大間似合干板・胸当て・カイなど8点(田中孝次郎)、観音講および妙見講に使用された供養箱と弁当箱(中島一巳)、鞍・犁・犁刃・ニチョウガケ(福田義雄)

ご寄贈ありがとうございました。

(昭和63年10月現在、敬称略)

目次

資料館ノート
郷土資料館入館者数の動態…………… 1
収蔵庫ノート
甲子園口遺跡出土の弥生土器
(合田茂伸)…………… 2

寄贈資料一覧…………… 4

表紙：郷土資料館入館者数の動態

西宮市立郷土資料館ニュース第4号

発行 1989年1月1日 西宮市立郷土資料館
〒662 西宮市川添町15番26号 TEL0798-33-1298

第3号の訂正：2頁左42行写真1→写真1、4頁左39行第2回→第3回